

三峯神社本殿の復原研究

－三峯神社社殿の研究1－

Keywords

三峯神社 県指定文化財 室町時代
中世社殿 三峯山大縁起 旧本殿

AK14074 田中 眞弓



1. はじめに

1.1 研究目的・背景

三峯神社は埼玉県秩父市にある秩父神社・宝登山神社に並ぶ「秩父三社」のうちの一つである。関東では最大のパワースポットとして近年話題にもなっていて、毎月一日に白い氣守という御神木の入ったお守りを求めて非常に多くの参拝者が訪れることで知られている。

三峯神社の歴史は長く、創建されたのは今から約1900年も前のことになる。また明治期の神仏分離の影響も受けているため、境内には歴史とともに変遷があったことは明確である。しかし、三峯神社の境内の変遷についての研究は少なく、境内社の中に旧本殿の社殿が摂末社に並んで、東照宮の上舎として現存していることもあまり知られていない。東照宮上舎は、三峯神社境内の社殿の中で最古の室町時代のものとされている。しかし、東照宮上舎には室町時代以降の社殿の特徴であると言える部分も見受けられ、現在の位置へ移築される際に変更された部分があると考えられる。

そこで本研究では、実測調査と歴史的文献の調査をもとに、旧本殿である東照宮上舎がどれほど室町時代の社殿形式を残しているのかを、建立当初の姿を復元することによって明らかにし、現存している境内最古の社殿としての価値を証明する。また、現在の本殿及び東照宮上舎と比較し、三峯神社の境内の変遷を紐解く一つの資料となることを最終目的とする。

1.2 研究方法

- ①三峯神社にて実測調査を行い、図面を作成する。
- ②歴史的文献を入手し、境内変遷について調査する。
- ③同時期建立の社殿の修理工事資料を参考に、各部材等の年代判定を行う。
- ④推定できる旧本殿を復原する。
- ⑤復原することで、旧本殿と東照宮上舎を比較し、現存する社殿の価値について考察する。

1.3 実測調査

以下の期間で現地へ向かい、実測調査を行った。

調査日：2017年8月8-10日

2. 三峯神社について

2.1 歴史

『三峯山大縁起』によると、約1900年前に日本武尊が東征で雲取山・白岩山・妙法ヶ岳の三山を訪れ、伊弉諾尊・伊弉册尊の国造りを偲び、景行天皇によって三峯宮が創建されたことが始まりとされている。聖武天皇に「大明神」の神号を授かり、文武天皇の御代にはのちの修験道の開祖の役小角が伊豆から訪れ、三峯山は山伏の修験道となる。淳和天皇の勅命で弘法大師が三峯宮の脇に本堂を建立し、天下泰平と国家安穩を祈って本地堂としたことで神仏習合の社となり、徐々に仏教色を増す。

鎌倉時代には三峯山の信仰も広まり、東国武士の信仰も集めるが、天平7年（1352）足利討伐に敗れた新田氏らが三峯山に身を潜めたことで怒った足利氏に社領を奪われ、急激に衰退する。それから約150年後の文亀2年、三峯山の荒廃を嘆いた月観道満が約27年の歳月をかけて全国を行脚して募った復興資金で社殿・堂宇を再建する。本研究で調査を行うのはこの時に再建された本殿である。復興した天文2年には後奈良天皇から「大権現」の神号を授かり、坊門第一の霊山となり、天台修験の関東総本山とされ、「三峯山高雲寺」と称する。

江戸時代には徳川将軍家と紀州家、関東郡代伊奈家から篤い崇敬を受け、十万石の格式まで繁栄した三峯山は宝永7年（1710）に一如法印が亡くなってからの約10年間、一時期無住の状態に陥り短期間荒れたが、享保5年（1720）頃に日光法印によって社殿と堂宇が修復され、三峯山は再び隆盛を極める。その後、明治2年（1869）の神仏分離令によって「三峯山観音高雲寺」が廃寺となり、現在の三峯神社に至る。

2.2 特徴

三峯神社の特徴として、狼が神のお使いとされていることから狼信仰がある。その証に、三峯神社には狛犬ではなく「狼」の像が数多く見受けられる。これは享保5年（1720）以降の三峯神社再興に携わった日光法印によって広められた信仰であり、



写真1 鳥居前御神犬

かつて東征の際に道に迷った日本武尊の道案内を狼が務めたとされていることから、害獣除け火除け・盗賊除け・災難除けによって信仰を集めたと伝えられている。

2.3 現本殿について

本殿の再建は寛文元年（1661）であり、棟札が残っている。また明暦元年（1655）の墨書銘のある杓も発見されていて、このころには再建を行っていた。『三峯神社史料集』によると享保8年（1723）には軒通りが修復されている。

現在の本殿は隅木入りの一間社春日造で、銅板葺きの屋根、妻入り、入母屋千鳥破風、二軒繁垂木、そして細かい彫刻と鮮やかな極彩色であることが特徴の社殿であり、建立された江戸時代中期の特徴と一致する。そして、境内社殿の中で唯一埼玉県指定文化財となっている。

現本殿が県指定文化財となった昭和36年時点の平面図が図2である。これは三峯神社が伊勢湾台風の影響で大きな被害を受けた昭和34年に、報徳記念事業と称して本殿・拝殿・隨身門を漆塗替え及び改修復元工事を行なった際のものである。この時、本殿の扉は相殿になっていることが図面からわかる。それから40年後の平成14年には月観道満山主入山500年記念行事と称して、報徳記念行事と同様の修復を行ったため、現在のような鮮やかな社殿が保たれている。

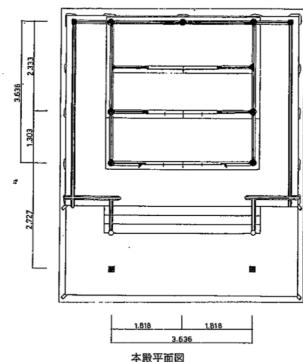


図2 三峯神社本殿平面図

3. 旧本殿について

3.1 旧本殿

前項で触れたように、三峯山には二度大きく荒廃していた歴史がある。その中でも本研究では、足利氏によって社領を奪われたのちに、月観道満によって復興された本殿について復原と考察をする。

対象とする東照宮上舎は、現在の三峯神社境内の中で最古の貴重な室町時代の社殿である。天文2年（1533）の旧本殿の棟札が存在していたことは史料『三峯山大縁起』に明記されている。

3.2 室町時代の特徴

『三峯大観』によると、三峯山は江戸時代に徳川將軍家から篤い崇敬を受けていたことで、寛永元年（1624）4月17日に境内摂社として徳川家康を祭神とする東照宮が創立造営されたと記されている。

東照宮上舎は隅木入りでない一間社春日造、屋根は銅板葺



写真2 東照宮上舎

き、妻入、一軒繁垂木、現本殿のように鮮やかな彫刻はない。平成25年（2013）から伊勢神宮の式年遷宮に合わせて行った三峯神社境内摂末社の修復工事によって、東照宮上舎も塗替えが行われたため、現在は鮮やかな色になっている。（写真2）

(1) 虹梁

東照宮上舎の虹梁のうち、向拝正面についている水引虹梁は彫刻の様子から年代判定を行う。時代の特徴が最も現れるのは端部の絵様にある。近世社殿の端部の絵様は「渦」と「若葉」があることだが、東照宮上舎の虹梁は袖切のみであり、渦や若葉はない。



写真3 東照宮上舎 虹梁

（写真3）これは栃木県にある永正8年（1511）建立の円通寺表門と同様の形であり、中世社殿の特徴と一致しており、天文2年棟札の通り室町時代のものと推定できる。

(2) 木鼻

東照宮上舎の木鼻は禅宗様であることがわかっている。木鼻は中世のものは渦が円形であり、表面の彫りが浅く狭いものが多いが、時代が下っていくにつれて木鼻が長くなり、渦も楕円形、彫りは深く幅広くなっていくという特徴がある。東照宮上舎の木鼻の年代判定を行う際に、東照宮上舎の木鼻と特徴が一致する木鼻のある山梨県の大永2年（1522）建立の天神社本殿を参考にした。渦が円形であることと、彫りが浅いことから、木鼻も室町時代のものと推定する。

3.3 東照宮上舎の各部について

東照宮上舎の室町時代の社殿の特徴と一致する点についてあげたが、寛文元年に移築された本殿であると考えられると、室町時代の社殿としての特徴とは一致しない点を実測調査によって数カ所発見した。

(1) 身舎柱

まず、最も旧本殿とは異なる部分としてあげられるのが身舎柱である。東照宮上舎の身舎柱は円柱ではなく角柱になっている。『神社読本』によると本殿の柱は一般的には円柱であり、これは「正式な柱」であることを示している。それに対して角柱は、「略式の柱」であることを示すもので、向拝柱が角柱であるのはこのような意味も含められているためである。また、奈良県指定文化財になっている春日造の本殿についても全て史料調査を行なったが、どの年代に建立されたものであっても、全ての社殿で必ず本殿の身舎柱は円柱だった。

よって、旧本殿の身舎柱は円柱であったとして復元を行う。そして、東照宮上舎として移築された際に、

角柱に変更された理由としては、新本殿を再建するにあたり、旧本殿から全く変更のない社殿のままでと新本殿に対して失礼にあたり、本殿ではなくなったことによって形を変える必要があるためと推測する。同様に東照宮上舎に並ぶ摂末社も全て身舎柱は角柱であることから、摂末社としての社殿になる際に角柱に変更されたと捉えて良いと考える。

(2) 墓股

鎌倉時代から室町時代にかけての墓股は、内部全体を一つの意匠として考えていて、対称性が崩れ、絵画的になるのが特徴であり、



写真4 東照宮上舎 墓股

東照宮上舎の墓股もこの特徴と一致している。(写真4)しかし、東照宮上舎には墓股の斗がない。これを移築の際に欠損したものと推測し、室町時代の他の社殿の墓股を参考に斗の復元を行うと、垂木の収まり方が変わる。

この垂木の収め方について考える際に、元応2年(1320)建立の宇太水分神社本殿を参考にした。宇太水分神社は隅木入り春日造の社殿の現存するもののうち最古の社殿であるが、向拝部分の組物の様子は東照宮上舎と類似していて、建立年代も近い。宇太水分神社本殿では東照宮上舎のように通肘木を用いるのではなく、実肘木を用いることによって墓股と上の垂木を収めている。これを旧本殿の復元で用いる。

(3) 屋根

墓股に斗がつくことによって、垂木の傾斜が緩やかになることがわかり、それに伴って屋根の傾斜も緩やかであったと推定できる。時代が下るにつれて、屋根の傾斜は急になっていくため、旧本殿の屋根傾斜の方が緩やかであった可能性は非常に高い。

また『三峯神社史料集』によると、東照宮上舎の屋根は移築後に三峯山が一時無住となった後の日光法印による再興の際に、修復を行なっているため、現在の屋根は旧本殿から、修復されたものであることは明確である。また、同時期の春日造の社殿の屋根は檜皮葺であったことから、旧本殿の屋根も檜皮葺屋根として復原を行う。

(4) 藁座と扉

現在の東照宮上舎の外陣の扉は、旧本殿の扉であり、武田信玄によって天文年間に寄進された「八重の御扉」であると伝えられている。(写真5)この扉に対して、藁座は通常の一間社のものと比べると大きく、不自然な位置にある。写真6のように、二つの藁座の中央に一つの藁座が用途を果たされていない状態で残されているのである。これには軸2本を立てた痕跡がある。このことから、旧本殿に扉が二つあったと推測する。旧本

殿が建立されたのは天文2年であり、天文10年に自立した武田信玄から扉が寄進されたのは建立後数年が経っているため、旧本殿には八重の御扉の前に別の扉があったと言える。そこで、三峯神社は伊弉諾尊・伊弉册尊の夫婦神を主祭神として祀っているため、相殿だった可能性も高い。また、2.3の図2にあるように現本殿も以前は扉が二つだった。よって同様な扉に関する変遷があった埼玉県大宮氷川神社の歴史を参考にする。



写真5 八重の御扉



写真6 東照宮上舎 藁座

4. 大宮氷川神社

4.1 大宮氷川神社について

大宮氷川神社は埼玉県さいたま市大宮区高鼻町に位置する。東京都、埼玉県近辺に約200社ある氷川神社の総本社であり、主祭神は須佐之男命と稲田姫命、大己貴命の三神で三峯神社と同様に夫婦神を祀っている神社である。現在は一棟の社殿に合祀しているが、『武蔵國一宮誌』によると、本殿の形態には変遷があった。

4.2 本殿の変遷

現在の大宮氷川神社本殿は三間社の流造であり、明治15年に造営された。主祭神の三神を祀る形が現在のものになるまでの経過を表1にまとめる。

氷川神社の場合は三神のうち夫婦神である須佐之男命と稲田姫命を二間社で相殿として合祀していたが、最終的に三神を合祀している。

東照宮上舎の場合は、春日造なので二間社になることはないが、扉が二つの相殿にはなり得る。そして、旧本殿が建立された頃と同時期の社殿が相殿として複数の祭神を祀っている社殿では、再建の際に祭神を一間社に合祀するという流れが歴史上にあったことが確認できる。

表1 大宮氷川神社本殿の変遷

年代	形式・特徴	現在の状況
年代不詳	二間社の相殿	中山神社本殿
文禄5年 (1596)	二間社流造 女體社との相殿	上大久保 氷川神社本殿
年代不詳	一間社流造 三神を合祀したと推定	大間木 氷川神社本殿
寛文7年 (1667)	三間社流造の男體社、 女體社、簸王子社を造営	
明治15年 (1882)	三間社流造 三神を合祀する	昭和39年に 屋根葺替え

5. 旧本殿の復原

5.1 旧本殿の復原方法

実測調査の結果と埼玉県・奈良県・山梨県の社殿の資料調査、大宮氷川神社の本殿の変遷の歴史の資料を参考に、天文2年（1533）に建立された三峯神社旧本殿の復原を行なった。

まず、円柱だった柱の寸法について考察する。天文2年に建立した際の柱をそのまま使用して移築した場合、円柱の4周を切り落として角柱にしたことになるため、それだけの太さが必要になる。よって現在の角柱の寸法から考えて、円柱の直径は282mmとなる。

次に身舎の扉を相殿にするためには、現本殿の改修前の相殿の大きさと身舎の寸法比率を利用すると旧本殿は図3のようになる。よって中央の目的を果たしていなかった藁座がどのように使われていたのかが明らかになった。これらの寸法を利用し、また3に示した各部についても復原する。

5.1 旧本殿と東照宮上舎の比較

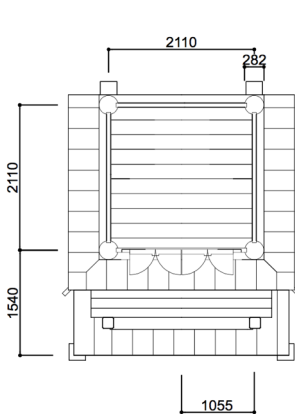


図3 旧本殿 平面図

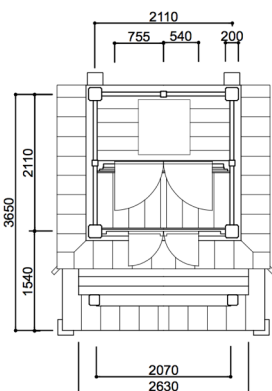


図4 東照宮上舎 平面図

平面図を比較すると、現在の東照宮上舎と大きく異なるのは、相殿の扉と、身舎柱、そして内部空間である。

（図3、図4）相殿として夫婦神である主祭神を祀っていたことから、一つの扉で合祀するということは中世社殿の歴史上にあったことが確認されている。社殿が東照宮上舎として移築されて、祭神が徳川家康ひとりになったことが要因で一つの扉に変更したとも考えられた。しかし、この場合は旧本殿が本殿として存在していた時に、相殿から武田信玄から寄進された一つの扉にすることで夫婦神を合祀したことになる。また、現本殿でも同様の流れがあったことは、伊弉諾尊・伊弉册尊を相殿として祀ることに三峯神社がこだわっていた様子が伺える。

また、身舎の内部が内陣と外陣に分割されるようになったのは、旧本殿が東照宮上舎として移築される際の変更点であったと推測する。実測調査の際に、東照宮上舎の内部についても調査することができたが、東照宮上舎の内陣とする部分の木材が明らかに身舎の壁の木材より

も新しいものであると見受けられたためである。また、一間社の場合、内陣・外陣に分けられているものであれば、その柱を肘木が受けるものだが、東照宮上舎の場合には肘木がなかった。このようなことから、旧本殿は内陣・外陣に分かれていなかったと考える。

また、円柱のように旧本殿の部材をそのまま利用している箇所がほとんどで室町時代の社殿の特徴を残していたが、東照宮上舎として移築する際に収まりが悪いものについては、藁座の斗のように取り除き、藁座のように用途不明のまま残したことによって、不自然になっている部分も数カ所発見できた。このような点が旧本殿の建立当初の姿を復原するきっかけとなった。

5.2 旧本殿と本殿の比較

旧本殿の復原を行うことで、東照宮上舎には室町時代の社殿の特徴が多く残されていることがわかった。現本殿と比較すると、旧本殿は大きく荒廃した三峯神社の復興のために資金を募って再興された社殿であったが、その約100年後の江戸時代には徳川将軍家をはじめ、伊奈家などから篤い信仰を受け、十万石の格式にまでなった頃に建て替えられたものであることも含め、近世の特徴を大いに表現したものとなり、鮮やかでその格式にふさわしい本殿に再建されたことが表れている。

6. 結論

三峯神社の社殿についての研究は少なく、境内社殿の歴史と変遷については未だに明らかではない。三峯神社には23の摂末社があるが、長い歴史の中で摂末社の配置は何度も大きく変更があったこともわかっているが、研究は行われていない。その中でも、今回様々な史料調査と、同時期中世社殿、一間社春日造について調査することで、旧本殿の復原を行なった。本研究は、三峯神社の境内社の変遷を解読する手がかりとなる。

現在の三峯神社の境内にある社殿の多くが、近世以降に再建・増改築されたものであり、境内社殿は確実に歴史とともに変化している。これらの社殿は、それぞれ特徴的な彫刻や鮮やかな色彩、そして著名な作者によって建立されたものであり、価値が明らかなものが多いが、境内最古の社殿であり、三峯神社の境内変遷を明らかにするために欠かせない存在となり得る東照宮上舎は、三峯神社にとって非常に貴重な社殿である。

参考文献

- 1) 横山晴夫「三峯神社史料集 第一巻」三峯神社社務所 昭和58年
- 2) 江森泰吉「三峯大観」1916年
- 3) 「大宮氷川神社に関する研究-近世から現代への変遷-」 ak12009 石井大貴 2015年度芝浦工業大学工学部建築工学科卒業論文
- 4) 天沼俊一「日本建築細部変遷小図録」星野書店 昭和19年
- 5) 太田博太郎「日本建築史基礎資料集成 社殿I,II,III」中央公論美術出版 1998年